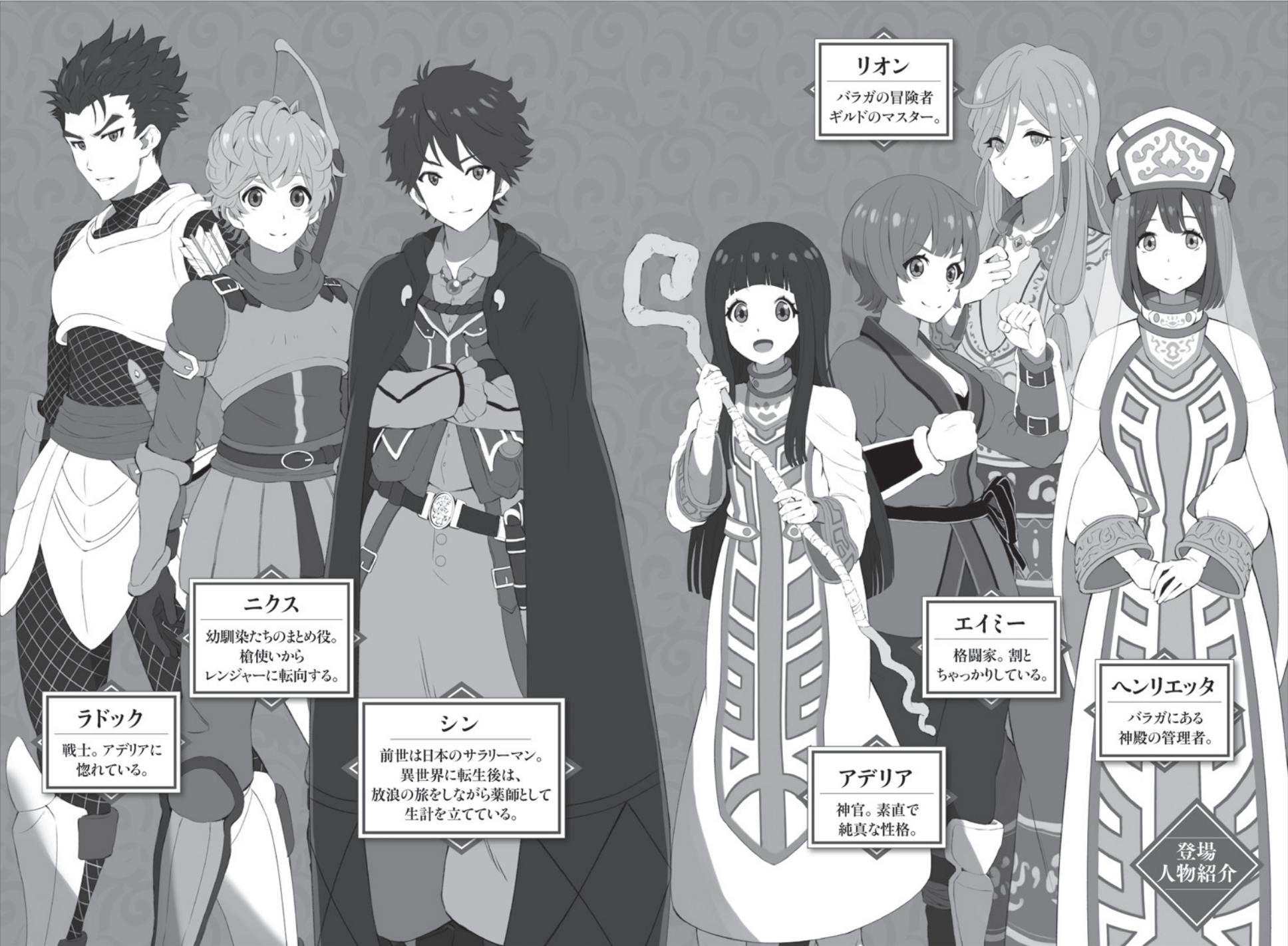


転生薬師は
異世界を巡る

*Tensei
kusushi ha
isekai wo
meguru*

山川イブキ
Ibuki Yamakawa

2



リオン

バラガの冒険者
ギルドのマスター。

ニクス

幼馴染たちのまとめ役。
槍使いから
レンジャーに転向する。

ラドック

戦士。アデリアに
惚れている。

シン

前世は日本のサラリーマン。
異世界に転生後は、
放浪の旅をしながら薬師として
生計を立てている。

エイミー

格闘家。割と
ちゃっかりしている。

アデリア

神官。素直で
純真な性格。

ヘンリエッタ

バラガにある
神殿の管理者。

登場
人物紹介

目次

プロローグ 7

第一章 薬師と駆け出し冒険者 18

第二章 鉱山都市バラガ 98

第三章 崩れる日常 205

プロローグ

深い森の中を、少しばかり重い足取りで歩く男がいる。

比較的上質な麻布で作られた平服の上にたくさんのポケットがついた、見る人が見れば『ハンティングベスト』と言いそうな上着を身につけ、フード付きのマントを羽織った男だ。

健康的に焼けた小麦色の肌、短めに刈った黒髪を無造作に手櫛で整えた姿は爽やかな印象を与え、精悍な顔立ちながらも目元は柔らかく、柔和さも感じさせる。

胸元に着いた『シヨットシェルポケット』に筒状の各種薬瓶を弾薬よろしく差し込み、自分の身長よりも長い棒を杖のように扱う十人並み以上イケメン未満の男——転生者にして規格外の旅する薬師——シンは、草木を掻き分け木々の間を縫うように歩く。

少しだけ、そう、ほんの少しだけ憂鬱そうに……

その理由は——

「師匠~~~~~」

彼を師匠と呼ぶ声にあった。

『師匠』と呼ばれることが嫌なわけではない。多少は面映ゆくあるが、そう呼んでくる者を拒絶す

るほど、シンも冷淡無情の徒ではない。

しかし、いかに成人済みとはいえ、シンもまだ一六才。そんな若僧が師匠呼ばわりされれば、果たして一体何事か？ と、衆目を集めることになるのは必至。それがシンには受け入れられなかった。

そして、これが一番重要なのだが――

「師匠！ どうすれば師匠みたいに、”上手に魔法が使える”んですか？」

薬師にそんなことを聞かれても困るのだ。

（どうしてこうなった！）

シンは現在、四人の新人冒険者パーティと、一時的にだが行動をともにしている。

その中の一人で、見るからに“駆け出しの魔道士です！”といった雰囲気（ふんいき）の美少女が、シンのことを師匠と呼び、熱心に教えを請うている最中だ。

美少女に懐かれさぞやいい気分――などと外野から怨嗟（えんさ）の声が聞こえてきそうな情景だが、悲しいかな、未成年の彼女はシンにとって恋愛対象外であり、誰一人として得にならない構図である。とはいえ、このような状況をいつまでも許しては、いずれ『異世界転生した俺が薬師として旅をしていたら、駆け出し美少女魔道士の師匠になった件について』という物語が――

「ししよ~~~~~」

始まらない、はずである……



時は少し遡（さかのぼ）る。

マクノイド森林地帯――シンが足を踏み入れた場所は、アトワルド王国の国境から南へ進むこと三〇〇キロにある、南北へ一五〇キロ、東西へ三〇〇キロも広がる森の名だ。

彼が目的地としていた鉱山都市は、この森を越えた先にあった。

通常なら、国境から森を沿うように作られた街道を馬車で走ること、およそ三週間はかかる旅である。しかしシンは、馬車に乗るところか徒歩で、しかもマクノイド森林地帯を突っ切る最短距離を進んでいた。

その理由は、道中に採取できる植物や鉱物、また出くわす魔物がシンにとっては大切な素材であり、馬車にただ揺られるだけの三週間など時間の無駄でしかないからだ。

王国で散々消費した薬品も材料の補充が済み、現在は、珍しい素材や食材がないかと目を光らせながら、森の中を徘徊（徘徊）する日々である。

そうして森に入って一〇日目だろうか、シンは森に入って初めて、自分以外の人間に遭遇（遭遇）することになる。そう、今にも全滅しそうな冒険者パーティに――

「くそっ！ 俺のことはいいから、お前たちだけでも逃げろ！」

「ラドック、この馬鹿！ つまんないこと言う元氣があるんならさっさと立ちなさいよ！」

「エイミーの言うとおりだよ！ アデリア、ここは僕らに任せてキミはラドックの手当てを！」

「う、うん、ニクス、お願いね！ でもその前に二人とも——「防衛」」

「サンキューアデリア、やるよ、ニクス！」

シンの視線の先には、一〇体以上のコボルトの群れに囲まれた冒険者と思しき、いや、まだ少年少女にしか見えない、武器を構えた四人組の姿があった。

コボルト…Fランクモンスター

全身を獣毛に覆われた、身長一三〇センチほどの狼が直立したような風貌の魔物。犬頭とも呼ばれ、知能はあるが低い。集団行動を好み、単独で行動することは稀。

人間の死体から剥ぎ取った衣類や装備を身につけているが、ろくな手入れをしておらず、全体的に薄汚れた身なりをしている。素材として使える部分は少なく、体内に宿る魔石も小さい。

冒険者とは、危険と隣り合わせの職業であり、生き方だ。

依頼を受けて魔物を狩ることのある彼らが、判断を誤り、逆に狩られる立場になったとしても、そしてシンがそれを見て見ぬ振りをしたとしても、怨まれる筋合いはない。

「ハア……」

とはいえ、それは一端の冒険者に限った話で、目の前で危機に瀕しているのが冒険者も、どきとあつては、さすがにシンも素通りはできなかった。

小さく溜め息をついた彼は、腰に下げたベルトポーチから薬瓶を取り出し、投げる。

ヒュッ——カシャン！

「なんだ？ ——ゲエッ!!」

「キヤアアアア、何よ、この臭い!？」

「グギャ!! グルッグルル——!!」

地面に落ちて割れたそれは、中に詰まったシンの特製「激臭剤」を周囲に撒き散らすと、敵味方の区別なく、嗅いだ者全てを悶絶させた。

濃度の濃い、腐卵臭とアンモニア臭の混ざった刺激臭に、四人はその場に膝をつき、コボルトたちは一旦距離を取り、集合して態勢を立て直す。

「い、一体何が？」

「見殺しにするのも寝覚めが悪いから助けてやる、そこでじっとしてろ！ ……で、どうせ言葉は通じんだろが、警告はしてやる。尻尾を巻いて逃げるなら見逃してやるぞ、犬ところ？」

案の定、コボルトたちは新たに出現した敵を、犬歯をむき出しにして取り囲んだ。そして今にも飛びかかりそうな体勢のまま、シンににじり寄る。大事な鼻を潰されながら、それでも数で押せば勝てると思っているのだろうか。くだらないところだけ人間臭い。

「警告はしたぜ……風精よ、我が元に集い、我が意のままに踊り狂え、トルネード「竜巻」」

ゴウッ——!!

シンが風属性魔法の呪文を唱えると、彼を中心に竜巻が発生し、コボルトたちに襲いかかった。

力負けした半数が地面から離れ、暴風に飛ばされて竜巻の中をグルグル回る。残りの半数は、飛ばされまいと必死に踏ん張るも、それが精一杯のようで、動くこともままならない。

「ガウウツ!!」

「おー頑張^{がんば}ってるなあ。でも残念、これで終わりだよ」

シンは、人の頭ほどの大きさの布袋を取り出し、竜巻の中に放り込む。直後――

「ギャウウウウウウンン!!」

コボルトの悲鳴が周囲に響く。

袋の中には金属片が入っており、強風に煽^{あお}られ口を開くとそれは、暴風に乗^{のり}って礫^{つぶせ}のように飛び散り、コボルトの鎧や体を浅く切りつけ肉を抉^{えぐ}った。

また、一緒に入っていた鉄粉は、風によって押し広げられた傷口に入り込めば、さながら研磨剤のような働きをし、傷口を、そしてコボルトの命を削^{けず}り取っていく。

やがて、五分と経たずに生きているコボルトはいなくなった。

「すごい……」

戦闘と言う名の一方的な殺戮^{さつりく}が終わり、一部始終を見ていた四人の口からそんな言葉が漏れる。

シンはそんな彼らに顔を向けた。

「無事でなにより――と言いたところだが、お前たち、見たところまだ駆け出しだろう、なんでこんな森の奥まで？」

「あ――助けてくれてありがとう……アンタは一体？」



まだ事態が呑み込めていないのか、エイミーと呼ばれていた気の強そうな少女は、質問に対して質問で返してくる。

それを見て、どうしたものかと首を捻るシンの前に、別の少女が近付いてきた。

「あ、あの!!」

「ん?」

「お願いです、弟子にしてください!!」

その言葉を聞いたシンは天を仰ぎ見て、女神、そして死神に対し、今度自分の引きについてじっくり話そうと、固く心に決めた。

「あ、あの……」

「……まあ、とりあえず自己紹介から始めるか。俺はシン、見ての通り旅の薬師だ」

「ええっ!! 師匠は魔道士じゃないんですか?」

「誰が師匠だ……」

「まあまあアデリア、自己紹介も済ませていないのに質問攻めにするものじゃないよ。はじめまして、僕の名はニクス、槍使いです。今回は助けていただき、ありがとうございます」

アデリアの言葉にげんなりするシンを見て、フォローのつもりか、ニクスと名乗った少年が自己紹介をする。その様子を見て、残りの三人も次々に名乗りを上げた。

「あ、あのつ、私、アデリアって言います! まだ腕の方は全然だけど、魔道士です!!」

「アタシはエイミー、助けてくれてありがとう。見ての通り格闘家だよ」

「……ラドック、剣士だ」

全員が名乗り終わると、改めてシンは、四人に向かって大切な質問をする。

「なんでお前らみたいな駆け出しが、こんな森の奥まで潜ってるんだ?」

そう言われた少年少女は、一様に表情を暗いものに変えた。

「――つまり、後のない新人どもが一発逆転を狙ってあのザマ、と……」

冒険者という存在に憧れてギルドの門を叩くも、スタートとゴールを勘違いした駆け出しが現実という壁にぶち当たる。実によくある話だった。

「ボクたちも当然、はじめは簡単な仕事からコツコツやるつもりだったんですけどね。他の人の邪魔が入って……」

「簡単な仕事は誰でもできるからな。小遣い稼ぎと新人潰し、一石二鳥の美味しい仕事だ」

成り上がる手段として冒険者を目指す人間は多いが、彼らに依頼する仕事は準備万端、常にあるわけではない。自分たちの食い扶持を確保するため、新参者を歓迎しない先輩冒険者も当然いる。

「まったく、器の小さいやつらよね、頭にくるわ!」

エイミーが盛大に愚痴る。彼女は気が強いのと同時に、短くもあるようだ。

「とはいえ、その程度の嫌がらせに屈するようじゃあ、冒険者として先は見えてるな」

「うっ……分かってるわよ!」

依頼の先取りは嫌がらせであると同時に、明日をも知れない冒険者の世界に踏み込む新人への、

先達^{せんた}からの試験とも言える。こんな入り口で泣^なきが入るような冒険者に、明るい将来など到底待つてはいないのだ。

「それで、どんな仕事を請^うけてこんな奥まで入ってきたんだ？」

「ハイ、鎧^{よろい}ヤモリ」の討伐と素材の確保です」

鎧^{よろい}ヤモリ…Eランクモンスター（脅^{きょう}威^い度 中々下）

その名の由来でもある硬い鱗に体を護^{まも}られた、体長二メートルの大型ヤモリ。鎧の素材にも使える鱗は刃を通さず、ゆえに弱点は、鱗に覆^{おほ}われていない腹部と目になる。

森の中を生息地とするが、ジメジメしたところを嫌い、陽の当たる、自身の体が登れるほどの大木と身を隠せる大岩^{いし}が転^{ころ}がっている地形を好む。

巨体に似合^あわず動きは俊敏^{しゅんびん}で、主な攻撃手段は体当たりと小さいながらも鋭い爪。また、唾^{だえき}液は強い酸性を帯びており、噛^かまれると非常に危険。

「ハア……お前たち、鎧^{よろい}ヤモリについてどれくらい知ってる？」

「バカにすんな！ そのくらい、事前に調べてるに決まってるんだろ！」

溜^ため息をつきながら質問するシンの態度が気に障^{さわ}ったのか、四人の中でただ一人、シンに対してあまり友好的ではないラドックが食^くってかかる。

「そうだな、事前に情報を集めるのは冒険者の基本だ。ちゃんとできてるようで偉いぞ……で、お

前ら、どうやって鎧^{よろい}ヤモリを倒すつもりだったんだ？」

少年たちの武器と言え、剣、槍、手甲と足甲、そして駆け出し魔道士の魔法。

鎧^{よろい}ヤモリを相手に、新人冒険者が策もなしに正攻法で挑むなど、無謀としか言いようがなかった。

「集めた情報は有効活用しないとなあ……死にたいのなら止めはしないが」

呆^{あき}れの混^まじったシンの冷淡な物言いに、四人は揃^{そろ}って押し黙る。

世の中は甘くない。ああ困った、大変だと嘆^{なげ}いていれば、親切な誰かが救いの手を差し伸べてくれる。そういったことは御伽噺^{おとぎばなし}の中だけだと、シンは思っている。

そう、助けが来るのをじっと待っているだけ、そんな甘ったれにシンが力を貸す義理はない。

「シンさん、お願いがあります。僕たちは強くなりたい、少なくとも鎧^{よろい}ヤモリを狩ることができくらいに！ だから、少しの間だけでもいいから、僕たちを鍛えてくれませんか？」

だが、真摯^{しんし}に教^しえを請^ううてくる、それも相手が子供というのであれば、少しくらいは世話を焼いてもいいかと思うのだった。

「ありがとうございます！」

「よろしくお願いします、師匠!!」

いまひとつ、納得しがたい言葉を聞きながら……

(……何か違うのか?)

第一章 薬師と駆け出し冒険者

シンを先頭に、その後を追いかけるように四人の少年少女が森を歩く。

「え、シンさんって、冒険者ギルドに登録してないの？」

「なんで薬師の俺が冒険者登録してると思うんだよ……」

「メチャクチャ強いから」

エイミーのシンプルかつ的確な回答に残りの誰もが納得し、ウンウンと頷く。

「個人情報……いや、なんでもない。冒険者ギルドに登録すると、レベルからスキルから全部知られちゃうだろ？俺みたいに、魔法も使える薬師なんて存在は、冒険者の目には相当便利な駒に見えるらしい。だから利用されないよう、冒険者登録はせずに素性を隠してるのさ」

自分は冒険者ではない、そう告げるシンに向かって、今度はニクスが質問を投げる。

「だったらシンさんは、どうしてこんな危険な森の中を？」

「俺は薬師だからな。金を稼ぐには薬を売らにやならんが、それを作ろうとすれば当然、材料が必要になる。そのとき、材料を自分で調達すれば、経費はかからず儲けはでかい。俺にとつて、森の中や魔物の住処は材料の宝庫というわけだ」

揚々と語るシンではあるが、言うほど簡単でないことくらい、ニクスにも理解できた。

だからこそ彼は、それができるであろうシンの目に、コボルト相手に全滅しそうになった自分たちが、果たしてどう映っているのかと、落ち込むと同時に無力さを痛感する。

しかし、そんなことを気にしているのはニクスだけのようで、他の面々は元気なものだった。

「でも師匠、さすがに一人旅だと、色々と不便じゃないですか？」

「だから師匠と呼ばないでくれ……そもそも俺の戦い方は冒険者向きじゃないんだ。周囲に毒を撒いた後、弱った相手をグサリつてのが基本でな。仲間ごと毒の餌食にするわけにもいかないし、使える魔法も広範囲に効果があるものが多くて、一人の方が気を使わなくて楽なんだよ」

「凄（すこ）いんですねー、私も師匠みたいな魔道士になりたいです!!」

「人の話を聞きなさいよ……」

毒云々をすつ飛ばし、魔法の部分だけを器用に耳に入れたアデリアは、凄（すこ）い凄（すこ）いと連呼する。

そして、そんな二人の和やかな（？）やり取りを、面白く思わない者もいた。

「ハッ！ いいように言っちゃあいるが、ようは『ぼっち』なんだろ？」

挑発するようなラドックの物言いに、しかしシンはスルー。そして……

「……ニクス、あれは反抗期と思春期、どっちの意味で俺は受け止めるべきなんだ？」

「そうですね、思春期の方でお願いします」

「了解。それにしても……若さっていいねえ、ぼっちのお兄さんには眩（まぶ）しいよ」

「おいつ、無視すんな!!」

「そういえば、見たところこのあたりはオークの縄張りっぽい。むやみやたらと騒ぐなよ？」
ヒュッ——！ と、誰かの息を呑む音が聞こえて以後、四人は一言も喋ろうとしなかった。

日も翳りはじめた頃、シンは夜営にちょうどいい場所を見つけ、立ち止まる。

「今日はこの辺で野宿だな……どうした、お前ら？」

シンが振り返るとそこには、歩き疲れてへたり込む四人の姿が。

「シ、シンさん……足腰……強過ぎ……よ」

エイミーが辛うじてそれだけ言うと、そのまま地面に突っ伏す。残りの三人は話すことさえできないように、シンはそれを見て溜め息をつく。

「たかだか四〇キロ歩いたくらいで……まずは基礎体力の強化だな、話にならない」

結局、夜営の準備も食事の準備もシンが一人で済ませ、その後も四人は食事を取ると倒れるように寝てしまった。

翌朝シンにお小言を食らったのは説明するまでもない。

「というわけで、とりあえずお前たちには基礎体力、つまり基本レベルから鍛えることにする。昨日あれだけ見事な醜態を晒しておいてイヤとは言わさん」

シンの声が朝の森の中に響くと、四人は揃ってバツの悪そうな表情を浮かべ首肯する。

昨日イヤと言うほど思い知らされた。四〇キロの距離をただ速めに歩く。それだけで自分たちは体力を使い果たし、シンは息も乱さない。両者の差をここまで見せつけられ、「そんなことより戦

い方を教える」などとはとても言えなかった。

素直な態度の四人にシンは満足する。

「お前ら、基本レベルはいくつだ？」

「一七です」「一八」「一六よ」「あの、一三です！」

「……本当に駆け出しもいいところだな」

シンは頭を抱えてしまった。

基本レベルは冒険者特有のものというわけではない。肉体の頑健さを示す指標として、全ての人間に存在する。ちなみに、特に鍛えなければ、三〇歳までは年齢Ⅱレベルといったところである。

四人は全員一三歳とのもので、魔道士のアデリアはともかく、戦闘職の三人は少しは鍛えているらしい。とはいえ、未熟としか言いようのないレベルではあるが。

「……よし、方針は決まった。とりあえず全員二週間でレベル四〇超えだな、覚悟しろ」

ちなみに、ランクF・Eはレベル六〇まで、D・Cは一〇〇まで、B・Aは一五〇まで、が冒険者の基本レベルの目安だ。それ以上は——その領域まで行ける者は極めて稀だが——大抵はランク指定外の特別扱いを受けることができる。

「ちよっ！ シンさん!? 二週間でレベル四〇って……アデリアまで？」

「当たり前だ、エイミー。魔法を使うのにも魔力があるんだ、レベルが低けりゃ何発も撃てんだろ。だがが安心しろ、俺の指導を忠実にこなせば、その程度の目標、余裕で達成できる」

シンは爽やかな笑顔で語るが、二週間でレベル四〇になる特訓とは、いったいどんな地獄なのか？ そればかりが四人の頭を駆け巡っていた。

そんな青ざめる面々を、シンは意図的に無視して言葉を続ける。

「まずは魔力展開による身体能力強化、これに慣れてもらう」

魔力展開による身体能力強化

魔法は個人の才能によるところが大きいですが、訓練さえ積みれば体内を流れる魔力を制御することは誰にでも可能である。その魔力を、動力補助を行うパワードスーツのように身体の表面に展開することで、身体能力を向上させることができる。

当然限界はあるものの、展開する魔力量と魔力制御スキルによって上昇幅は変化する。

上を目指す冒険者なら必須の技術だが、低ランク冒険者にはできない者も多い。むしろ、駆け出しのうちからできる方が稀である。当然四人はできないらしく、一様に表情が暗い。

「心配するな、これは泳ぎや逆立ちみたいに、コツさえ掴めば誰でもできるようになる技術だ。はじめだけ俺が導いてやるからお前ら、そこに並んで肩の力を抜け」

素直に従う四人の前に立ったシンは、まずエイミーとニクスの頭に自分の手を乗せ、そこから自分の魔力を二人に向かって流し込んだ。

ズクン——！

変化はすぐに現れ、シンの魔力を呼び水として、今まで二人の体内に留まっていた魔力が滲み出るように身体の表面に現れ、全身を包み込む。

「これって……もしかして、これが魔力？」

目に見えないはずの魔力が分かる、そんな不思議な感覚に戸惑うニクスたちをよそに、シンは残りの二人にも同様の施術をする。

シンが見守る中、己の身体に起きた変化に興奮しきりの四人は、それを確かめるように思い思いに動き回り、強くなった自分を楽しんだ。

——数分後。

「あ……う……」

「あれ……なん、で……？」

はじめに倒れたのは、基本レベルが一番低いアデリアだった。その後、続けざまに残りの三人がバタバタと倒れてしまう。皆青ざめた顔で寝転がっている。

魔力展開を長時間発動したことによる体内魔力の枯渇、いわゆる“魔力切れ”の症状だ。

「五分未満か……ともあれこれで魔力展開のコツは覚えたな。ついでにその弊害も。それを踏まえたとでお前たち！ 体調が万全な状態でも五分と続かない技なんて到底実戦では使えない。だからこそその基本レベルのアップだ。理解できたところでこれを飲め」

シンは、魔力回復薬を全員に飲ませて魔力を回復させる。

やがて、顔に赤味が戻った四人が立ち上がると、彼らに向かって言葉を続けた。

「ではここで一つ、お前たちを二週間でレベル四〇まで上げるための技を伝授してやる。くれぐれも他所^{よそ}で言^いって回^{まわ}らぬように。実は俺の使う魔力展開には、いくつか種類がある……」

魔力展開による身体能力抑制

全身を包む魔力に水あめのような粘^{ねば}ついた特性を与え、身体能力強化とは逆に、身体を動かすとき、常に負荷がかかる状態にする魔力展開式。

基本レベルの上昇を主眼に置いており、主に基礎体力および筋力面での強化が見込まれる。

「——とまあ、短期間で身体を鍛えられる、画期的な方法だ」

「師匠、凄^{すご}いです!! こんな方法を思いつくなんて」

「……アンタ、頭がイカレてんじゃねえのか？」

賞賛^{ちやうはん}と挑発^{てうはつ}、ブレない二人の言葉を聞き流すシンに向かって、ニクスが手を上げる。

「いくつかと言^いってましたけど、魔力展開の方法は他にもあるんですか？」

「あるにはあるが、お前たちが知る必要はないな……無駄に人死^{ひとし}にが出るのはごめんだ」

視線を逸^そらしたシンがボソリと呟^{つぶや}くと、それを聞いたニクスはブルンと身体を震わせ、背筋をピンと伸ばして硬直する。

シンの発した言葉から、冗談^{じやうだん}とは思えない、そしてあまり良くないものをニクスは感じとった。そんなニクスの態度に気付いたシンは、困^{こま}ったように笑顔を浮かべる。

「無駄話が過ぎたな。それじゃあ覚悟しろよ——」

ドン——!!

一瞬、痛みとは違う衝撃に全身を貫かれた四人は、自分の身体に何が起こしたのかを確認しようとして……自分たちの動きがあまりに鈍^{にん}いことに驚いた。

とにかく身体が動かない。腕を上下させるだけで両足を踏ん張らなければならないほどの負荷に、四人の口から苦悶^{くもん}の声が出た。

「どうだ、ただ動くだけでしんどいだろう、お前たちはこれから二週間、日中はその状態で過ごしてもらおう。それじゃあ移動するからついて来い」

シンはそれだけ言^いうと、返事を待たずに歩き出した。

四人は慌^{あわ}てて後を追うものの、予想以上に足が上^あがらず、仲良く転んでしまう。

重労働の末に立ち上がった彼らは、今度は倒れないよう慎重に歩を進めた。これ以上無駄に疲れたくないの思いだったが、四人の歩く速度では、シンとの距離は開くばかり。

試行錯誤の結果、必死の形相^{けいさう}を浮かべる四人の取った行動は、グロノロと走る^{はし}ることだった。

「シンさん、これ凄^{すご}くキツイんだけど……」

「そうだな、キツくない訓練があるなら俺も知りたい」

エイミーの訴えをにべもなく突^つっぱねるシン。

「クソ、一人だけのうのと歩いてズリいじゃねえか……アンタも一緒にやれよ!」

ラドックがシンを挑発^{てうはつ}するのだが、当の本人はどこふく風だ。

「あん？ やってるに決まってるだろうが。何を今更……ついではい、お前たち四人の身体能力抑制に必要な魔力も今は俺が供給してるんだ。憎まれ口を叩く前に、至れり尽くせりで鍛えてもらったことにしこたま感謝しろ。というか、喋る元気があるならキリキリ進め！」

まさかの返答に四人は声も出ない。事実ならシンは現在、自身を含めた五人分の魔力を消費しながら、平然と歩いていることになる。

魔力操作の技術も驚かされるが、目の前を歩く男の保有魔力量は一体いくらだといふのか？

そんな率直な疑問に、四人を代表してアデリアが質問する。

「師匠、のレベル……ひい……は、いくつ……ふう、なん……ですか？」

「ん？ そうだな、お前たち四人のレベルを合計しても俺の方が高いな、確実に」

より正確には『遥かに』高いのだが、さすがにシンも氣を使った。

四人は黙ってついていく。シンとの距離が離れないように、シンと自分たちとの差がこれ以上広がらないように。

——夕暮れに差しかかる頃、歩き詰めだった五人は野営に適した場所を見つけた。

四人がギリギリ離れない速度でシンが歩くこと二〇キロ、このままあと一〇キロも南下すれば森を抜けるだろうという場所だ。

見通しは良く、森の外縁に近付いたことから、魔物にも獣にも出会う確率は低いと判断したシンは、ここを拠点にして四人を鍛えること決めた。

「一人の脱落者も出ないとは、実に素晴らしい！ ……明日はもつと厳しくしても大丈夫だな」

「えっ？」「師匠？」「……ふぎ、けんな！」「これ以上キツいの!？」

訓練から解放され、その場に座り込んだ四人の訴えを、シンは華麗に聞き流す。

四人は知るよしもないことだが、自分たちが指導を請うた相手の信条は——

『強くなるため、まずは己を限界まで追い込むべし』

シンは鬼教官だった。

そしてその夜——

「早く寝たいところを悪いな、ニクス」

「いえ！ 何から何までシンさんにしてもらって、ボクたちなんか……」

二人の言葉が表すように、今この場で起きているのはシンとニクスだけ。残りは焚き火を挟んだ反対側で泥のように眠っている。あの様子では夢を見る余裕もないだろう。

シンは目の前に座るニクスを観察する。

身長は一七〇前後、現時点でこれなら、成人するとシンより確実に大きくなる。

整った目鼻立ちに、くすんだ金髪のショートボブ、物腰は穏やかで言葉遣いも丁寧。身なりを整えれば、下級貴族の子弟で通りそうだ。

シンは、っしだけ世の中の不公平を呪った。

「……ふん、イケメンが」

「え、何か言いました？」

「さあ？ 空耳だろ……で、話の続きだが気にするな。頼みを聞いた以上、俺にはお前たちを強くする責任があるんだ。とはいえ、しばらくは面白くもない基礎訓練ばかりだから覚悟しておけ……で、どうだ？ 訓練は始めたばかりだが、現時点での感想を聞きたい」

「それは……正直、不甲斐なく思っています。今日のこともですが、特に昨日は、ただ歩くだけであれだけ疲労するなんて自分でも驚きでした。僕らはあの程度だったのかと」

ニクスはそれだけ言うと、悔しそうに俯いてしまう。どうやら昨日の醜態がいまだに尾を引いているようだ。

そんなニクスに、シンは諭すように間違いを正してやる。

四人が過度に疲労したのは、シンが発した「オークの縄張り」という言葉が原因だということ。そのせいで必要以上に緊張し、常に周囲を警戒していたため、心身を磨り減らしたのだと。

それを聞いたニクスは、一度は安堵の表情を浮かべたものの、シンから告げられた言葉で再度、表情を曇らせる。

「だけどなニクス、あれこそがお前たち四人の弱点と言ってもいいんだぞ」

「えっ!? 弱点ってシンさん、どういうことですか？」

「お前たちのパーティには、索敵や周辺の警戒を担当する人間がないんだよ」

「あ……」

彼らのパーティは剣士、槍使い、格闘家、魔道士と、戦闘を主眼に置いた構成だ。

攻撃重視と言えば聞こえはいいが、裏を返せばそれしかできないと言っている。

駆け出し冒険者にとって最も重要なのは、生き残ること。そのために必要とするのは、力よりむしろ臆病と言われるほどの慎重さ、そして危険を察知し回避する能力だ。

新人の内はとにかく実績を欲しがる。おかげで多少無謀なことでも平気で行い、結果、大成する前に脱落する冒険者のなんと多いことか。先日 of 彼らはまさにそれだった。

「警戒の専門家がパーティに一人いれば、全員が緊張したまま移動することもなかった。警戒は一人に任せて、残った者は異変の報告を聞いてから対処すればいいんだからな」

「そうですね……」

「そこでだニクス、お前、槍を振るうのは一旦やめて、レンジャーをやってみろ」

「レンジャー……僕が、ですか？」

「そうだ」

今のまま彼らが強くなったとして、戦闘の役にしか立たない冒険者など、用意された戦場でしか力を発揮できない傭兵もどきの未来しかない。シンはニクスに、前衛が減ってパーティ全体の攻撃力が低下することよりも、ニクスがレンジャーになることの有用性を説く。

「この先お前たちが、冒険者としてのどの程度の未来を見据えているのか、俺は知らない。一つだけ確かなことは、パーティには一人、どんなときでも一歩引いた位置から全体を見渡せる立場の人間が必要だってことだ。四人の中でそれができそうなのはニクス、お前だけだろうからな」

「……どうして、僕ならできると思うんですか？」

「そりゃあ、俺のことを一番警戒してるのはお前だからだよ。ああ心配するな、ニクスの判断は正しい。むしろ俺は評価しているからこそ、この提案をしているんだ」

その言葉を聞いた瞬間、ニクスの身体に緊張が走る。何食わぬ顔でこれを受け流すことができるようなら一人前なのだが、一三歳でそんなことができたならそれが将来が心配というものだろう。

エイミーとアデリアは、シンのことを警戒している風には見えない。自分たちに害を及ぼす類の男ではないと、直感で理解しているようでもある。その辺は若くとも女性ということかもしれないが、そこは見破られるシンの方に問題がありそうだった。

四人の中で唯一、シンに対して反抗的な態度をとるラドックだが、これは、彼自身の極めて個人的な理由によるため、考慮するに値しない。

そんな中、ニクスだけがシンという存在を冷静に見極めようと、常に一步下がった位置から観察していた。

そういう判断ができるニクスだからこそ、先々のことも踏まえて、パーティのリーダーになつてもらわないといけない。シンがニクスを推す所以である。

「僕がリーダーに……」

「そうだ。その代わり覚悟しろ。リーダーになつたが最後、今後お前は仲間たちと同じ場所に立つていても、違う視点で物事を見なければいけない。必要とあらば仲間に対して耳の痛いことも言うし、戦闘になれば的確な指示を出し続ける必要がある。そしてなにより辛いのは、仲間の命より自分の命を優先しなければいけない……できるか？」

リーダーとは責任者である。そしてその役割は、最前線で身体を張ることも、仲間を救うために自分の命を投げ出すことでもない。リーダーは常に冷静で判断は的確、己の命を預けるに足る存在だと、仲間たちに思わせることだ——それがたとえ嘘だとしても。

リーダーが果たすべき責任とは、仲間を庇つて死ぬことではなく、最後まで生き残ること。仲間の命を一人でも多く救い、救えなかった仲間の死にゆく様を見届けること。そして、生き残った仲間から罵倒を受けることだ。シンはそう考えている。

この辺は戦争と同じで、将が討たれれば残りは蹂躪される。規模が違っただけで本質は同じなのだが、それを理解しない連中は、敵の矢面に立ち、一番危険な役回りを果たすリーダーを持って嘸す。曰く、『最高のリーダー』だと。

「俺の指導を受ける以上、お前をそんなのに育てるつもりはないが……どうする？」

シンの、これまでで一番真剣な視線を受け、ニクスはゴクリと唾を呑み込むと頭を下げた。

「……分かりました、頑張つてリーダーを務めます」

「そうか」

仲間のため、笑顔の裏でシンを警戒し続けていたニクスだ。こういう選択をするのは当然で、予想していたとはいえ、シンとしても誘導した感はない。なので、自ら辛い生き方を選んだ若者に対して、シンの方も色々配慮してやろうと誓った。

「それじゃあ今後、ニクスにはリーダーの心得とレンジャーとして必要なことを教えてやる。まあ、俺流のやり方なんて多少おかしいかもしれん。将来的には自分で修正しろよ」

「ハハッ、分かりました。ところで……色々教えてもらえるということは、僕は正式にシンさんの弟子ということですね。これからよろしくお願いします、師匠」

「……………」

洗面になるシンを見たニクスの顔に、ようやく年相応の笑みが浮かび、それを見たシンも、おどけたように肩をすくめる。

そしてシンは、ニクスにレンジャーとして、リーダーとして必要なことを語って聞かせた。

その教えが実を結ぶのがいつなのか、それは誰にも分からない。できれば、とりかえしのつかない事態が起こる前に、芽吹くくらいはして欲しい。

寝息を立てる少年の顔を眺めながら、シンはそう思った――

翌朝――

「というわけでニクスは今後、レンジャーとして行動すると同時に、このパーティのリーダーを務めてもらう。反論があれば今のうちに言っておけ、俺が論破してやる」

シンは朝食兼ミーティングの場で、ニクスのリーダー就任を告げる。

当然、反対の声は出なかった。

「よし、飯も食ったし、今日はこれから楽しい基礎訓練の時間なんだが……そんな顔するなよ。分かった、やる気を出させてやるから。お前たち、ステータスを見てみる」

昨日のことを思い出したのか、訓練と聞いて露骨に顔を顰める四人に、シンは自分のステータス

を確認させる。

ステータスを見ると、情報は網膜投影のように直接瞳に表示される。ゆえに、目を瞑ってようやく暗闇の中であろうが、正確に情報を見ることが可能だ。また、ホログラフのように浮かび上がるものでもないため、他人が覗き見することもできない。

余談だが、高レベルになれば、他人の情報も閲覧可能な『鑑定スキル』というものがある。

鑑定スキル

鑑定対象に魔力で触れることで、対象の情報を読み取るスキル。スキルレベルによって、得られる情報量に差が出る。

魔力が相手に触れるため、アイテムなどの無生物にはほぼ無条件で使えるが、周囲の変化に敏感な獣や魔物、魔力制御や感知能力の高い人間には察知され、逆探知を受ける可能性もある。

※人間への鑑定は禁止されており、それを破った者は、その国の法にのっとって処罰される。

重い表情でステータスを確認していた彼らだったが、次第に顔に生気が戻り、驚きの表情に変わっていく。

「し、師匠！ 私、レベルが一気に五つも上がってます!!」

「僕は三つ上がったよ、レベル二〇になってる!」

「アタシも二〇になってるよ!」

「俺は二一、マジか……」

この世界の人間の肉体は、魔物などの外敵が多いせいか、鍛えた分の効果が早く現れる。鍛錬の内容にもよるが、身体を苛め抜くことで一日にレベルが一つ上がることは珍しくない。

身体能力抑制下での高負荷運動。これは短期間で肉体を鍛えることが可能な反面、同時に魔力も消費する。そのため、四人のような低レベル冒険者では短時間しか行えない。

しかし今回、魔力展開に必要な魔力の供給をシンが肩代わりしたことにより、自分たちでは到底無理な長時間稼動が可能になり、結果、通常の数倍の速度で鍛えることができたのだ。

人間、特に若者とは現金なもので——それは異世界でも変わりなく——行動の成果を、目の前に分かりやすい形で示されると、俄然やる気を見せる。

レベル四〇、シンが四人に告げた数字は嘘でもハツタリでもなく、十分に達成が可能なのだと、自分たちは二週間後、その領域に立てるのだと、そんな強い思いに満ちていた。

「よし、やる気が出たようだなにより、それじゃあ今日のメニューだが……」

しかし彼らは知らない。

若さとはときに暴走し、目の前の危険を見過ごしがちになる。

昨日の訓練はあくまでひよつこ相手のものであり、今日から行われるのはそこから抜け出した、『駆け出し冒険者』向けであることを。

その結果——

「『だーーーーー………!!』」

マクノイド森林地帯に、四つの悲鳴が木霊した——

訓練五日目。

現在四人は、拠点から森の外まで、距離にして往復二〇キロの距離を、身体能力抑制をかけた状態で朝から夕暮れまで延々と走るといふ、実に地味な基礎訓練を続けている。

いくらシンでも、遠距離にいる相手に魔力を供給し続けることはできない。そのため、はじめはシンが引率しながらのマラソンだったが、三日目からは各人に魔力回復薬を持たせ、それぞれのペースで走らせるようにした。

そうなると今度は、次第に個人差が出はじめる。四日目が終わる頃には、一番早いエイミーと遅いアデリア、両者の速度差は倍ほどに広がっていた。

そこで五日目は個々の職業に合わせた訓練へと移行し、エイミーとニクスはそのままマラソン、ラドックには重りを背負わせる。アデリアは、走りながら初歩の魔法を発動させ、魔力向上と魔力操作スキルのレベルアップを目指していた。

そんな中でのシンの仕事は、もっぱら四人の食事係である。

体力や魔力は薬で回復させられても、強い肉体に作り変えるための栄養はちゃんとした食事ですべてやらなければ、レベルアップに悪影響が出てしまうのだ。

おかげでシンの異空間バッグからは、笑えない量の回復薬と食材が消えていった。

「——さて、日も暮れたことだし、訓練は終わりにして食事……といきたいところだが、エイミー

とラドック、前に来い」

シンに呼ばれた二人は何事かと訝しむが、それでも素直にシンの前までやって来る。

「前衛で戦う二人には追加の訓練メニューをくれてやる、感謝するように」

「げっ！」

二人は来るんじゃないかと、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「そう嫌がるな、今から行うのは簡単に筋力アップが見込まれる優れたものだ」

「本当に!?」

「ああ。だから二人ともそこに並べ」

簡単に筋力上昇と聞いて二人は素直に、特にエイミーは興奮気味に指示に従う。

シンが二人の身体に魔力を流した瞬間、二人の手足の付け根部分が、紐でギュッと縛られたように圧迫される。戸惑う二人に向かってシンはさらに、ダンベルを模した鉄の塊を両手に握らせた。

「今から俺と同じ動きをするんだ、よく見てろよ」

そう言うと、その場でシンは、ゆっくりヒンズースクワットをして見せる。

二人もシンに倣って、スクワット一回を一〇秒もかけて行なった。

「動作は覚えたな、じゃあさっきの動きを五〇回だ。はじめ！」

シンが施したのは、いわゆる加圧トレーニングである。

魔力によって血流を制限された二人の身体は、軽い運動でも相当量の負荷を受けている。事実、スクワットの回数が三〇を超えたあたりから、二人の手足が小刻みに震え出した。

「速い動きは反動を利用できるが、遅い動きだとそうもいかないからな。どうだ、苦しいか？」

「く、苦しい……」

「うん、知ってる」

「鬼かテメエは!!」

何を今さら——そんな表情を浮かべるシンは、憎々しげに睨んでくる二人に向かって微笑んだ。

「あ、今の動きは少し速かったな、一〇回追加だ。先に言っておくが、途中で止めたならそれは解除してやらんからな」

「鬼——!!」

「うん、知ってる」

……最終的に、二人とも一〇〇回ほどスクワットをすることになった。

「よし、今日の訓練はこれまでだな、飯食って寝ろよ——」

そしてまた夜。

「——なるほどな、だから冒険者、か」

「そういうこと、いつまでも誰かに寄りかかって生きてるわけにもいなくてね」

シンは、エイミーから冒険者を目指した動機を聞いていた。

冒険者になる人間は概ね二種類である。

憧れを胸にギルドの門を叩いた者と、生きるための手段に選んだ者、四人は後者だった。

鉱山都市バラガ。森を抜けた先にあるそこは、シンが立ち寄る予定の街であり、彼女たちが世話

になった孤児院がある街でもある。

住民の多くが鉱山関係者で占められているバラガが、福祉に力を入れているとは到底思えない。そんなところにある孤児院ならば、受け入れ可能な数もそう多くはないだろう。

そうなるも当然、年上の者から追い出される。下を受け入れないよりよほど良心的ではあるが、追い出された側にだって、明日を生きるための手段が用意されているわけではない。

商人や職人のもとで小さい頃から奉公に、とはよくある話だ。だが当然そちらの席には、ずっと前から別の誰かが座っている。結局、四人には冒険者という選択肢しか残っていないかった。

「まあ、冒険者が一番欲しいものは最初から持つてるんだ。残りは自分たちの手で掴み取るんだな」

「一番欲しいもの、か……仲間っていうより家族だけだね。それに、今は一時的とはいえ『師匠』もいるし、考えてみたら他のやつらよりよっぽど幸運かもね！」

『師匠』と呼ばれ、それが冗談と分かっていても渋面になるシン。

それを見たエイミーは笑いながら、興味深そうに両の拳をニギニギと動かした。

「最後にやったアレ、ホント凄いよね。やる前と後で明らかに違うのが分かるよ！」

「その分、やり過ぎると逆効果、最悪身体を壊しかねないからな。自分じゃ絶対やるなよ？」

「はい」

羽毛一枚程度の重みしか感じられない返答を、果たしてどこまで信じてよいものか、シンは自分の額に手をあてて懊悩する。軽いノリに反して訓練時の態度は真剣で呑み込みも早い。できればも

う少しだけ、思慮深さと礼儀を身につけてくれればと、思わずにはいられない。

「いや、本当にシンさんと出会えて良かったよ、命は助けてもらっただし、こうやって鍛えてもらってもあるし、正直、どうやって恩を返せばいいのかわからないよ」

頭を掻きつつエイミーが呟く。若干顔が赤いのは焚き火のせいではなく、多少の照れもあるのだろう。面と向かって感謝を伝えることができない、子供にはよくある話である。

「安心しろ、別にタダ働きするつもりはない、ちゃんと払うものは払ってもらうさ」

「……………え？」

……パチ……パチン！

エイミーの動きが急に止まると、焚き火の薪の爆ぜる音が耳に心地よく響いた。

「……なんだその間は。まさかとは思うが、俺が無償でやっているとでも思っていたのか？」

「いや、あははは……」

「むしろ、タダでここまでしてくれるやつがいたら、それこそ裏で何か企んでるぞ。絶対に」

「だよねえ……ちなみにいかほど？」

「そうだな。四人で金貨一〇〇枚ってとこかな」

金貨一枚は日本円に換算すると約一〇万円、つまり一〇〇枚なら一〇〇〇万円ほどだ。

「ムリ！ そんなお金ないよ!!」

当然のごとく金がないことをアピールするエイミーだったが、シンは無視した。

無表情かつ半目で自分を見据えてくる。そんなシンにエイミーはさらに焦るのだが、ふと、シン

の態度に違和感を覚え、改めて自分の状況に思い至る。

エイミーの装備は、厚手の麻布で作られた道着に似た長袖の上下を着込み、その上から金属製の手甲、足甲をつけている。日中は肌の露出がほとんどないのだが、反動だろうか、夜はそれを脱いで、スパッツとハーフトランクトップといった開放的な、半裸に近い姿で過ごしていた。

身長一七〇センチ弱、栗毛でショートカットの健康的な美少女が、薄布一枚で張りの良さそうな瑞々しい肌を惜しげもなく晒すというのは、いささか扇情的だろう。

長い付き合いの三人はともかく、命の恩人とはいえ数日前に会った、それも若い男の前でする格好ではない。

「シンさん……どこ見てるの？」

腕を交差させ、発育のよい胸を隠そうとするエイミーの顔は、焚き火の明かりに照らされてか赤く染まり、先程までの威勢は鳴りを潜めてしまっていた。

それでも気丈に、威嚇するような視線を送るエイミーに向かって、シンはこれ見よがしに大きく肩を落とし、努めて冷静に話しかける。

「どこと言われてもなあ……いくら俺が見張りをしてるから安全とはいえ、さすがにその薄着はないと思うぞ。まあ、目の保養になると言えなくもないので、無理に隠せとは言わんが」

「あ、うん……」

「俺が同行している間は許すにしても、俺がいなくなって四人に戻ったときは、間違ってもそんな気の抜けた格好はするなよ。どんなに鍛えようと、寝ているときは誰もが無防備だ」

「……ハイ、気をつけるよ」

まさか、返ってきたのが謝罪ではなく小言とあっては、意識していたのは本人だけだったと言わざるをえず、バツが悪いエイミーはなんとか誤魔化そうと頭を掻いた。

それを見たシンも表情を和らげ——誤魔化せたと、心の中で歓声を上げた（詐術レベル五）。

「話がズレたな。報酬の件だが、法外というほどでもないだろう？ お前たちを全員、Eランクに片足を突っ込む程度まで鍛えてやるんだ。加えて、俺が用意してる食料や回復薬の量を考えてみる」

「うん、そうだね……でも」

「なにも今すぐ払えとは言っていない。お前たちがもつと上のランクになって、そのくらい楽に稼げるようになってからでいい」

「ホントに!？」

「ああ、本当だから安心しろ。それから声が大きい」

最初は月賦でコツコツ、とも考えたシンだが、そうなると、定期的に彼らと会う必要がある。それに、返済に追われた四人が、今回みたいな無謀な行動をまた起こさないとも限らない。

幸いなことにシンは現在、手元にまとまった金があるおかげで、心には充分な余裕があった。

「よかった、実はそれだけが気掛かりだったんだよね」

安堵の溜め息をつくエイミーを見ながら、シンはそういえばニクスとはこんな話はしなかったな——と数日前のことを思い出す。

金勘定は、果たして女がしっかりしているのか、それとも男が無頓着なのか……

やがて、話を終えたエイミーがスヤスヤと寝息を立てはじめた頃――

「これは独り言なんだが、人間ってのは起きてるときと寝てるときで、息づかいに違いが出るんだ。気をつけないとな」

ガサツ――

焚き火を挟んだ向こう側から、誰かが身じろぎする音が聞こえると、先程までシンの耳に届いていた息づかいの一つが、急に聞こえなくなる。

シンの教えを守り、耳を地面に当て、即座に立ち上がれるよううつ伏せに寝ているはずの男に目を向け――

「青春だねえ……」

リア充はどいつもこいつも爆発してしまえと、シンは星に願った。

訓練八日目。

夕方、拠点に戻った四人の表情は一樣に暗いものだった。理由は、今日の訓練内容である。

この日シンは、アデリアがレベル三〇を超えたのを機に、四人に対して課題を出した。

課題の内容は、拠点から森の奥に向かって三キロ以内の場所に、小さな木箱を置いてきたので探して来いというものだったのだが、四人の表情を見る限り、見つからなかったようである。

そんな四人の耳に、シンの冷たい声が響いた。

「ニクス、報告を」

「すみません、シンさん……見つけれませんでした」

「そんなのは顔を見れば分かる。次は結果ではなく過程を聞くとしよう。どうやって探した？」

「それは……その」

「いや、みんな散らばって探したんだけど、どこにもなかったよ」

「いくら訓練だからって、ヒントぐらいくれてもいいだろうが？」

「あの、手分けしてみんな一生懸命探したんです、でも……」

言いよどむニクスの後ろから、叱られる彼を擁護するためか、三人が口々に喋り出す。しかし、それを聞いたシンは眉間に皺を寄せ、ニクスに手招きをする。

「ニクス、ちょっと来い」

「なんですか、シンさ――ぐはっ!!」

顔を殴られたニクスは、そのまま後方、三人の足元まで吹っ飛ばされた。

「ニクス!! てめえ、何しやが……」

ニクスに向かってしゃがみ込んだラドックが、シンを怒鳴りつけようと顔を上げた――が、シンの底冷えする冷たい視線にあてられて口ごもってしまう。

残りの二人も、いつもと違うシンの雰囲気^{ふんいき}に気圧^{けお}されて何も言えないでいた。

「ニクス、お前の口から聞きたい。危険な森の奥で三人に単独行動を指示したのはお前か？」

ここで四人は、シンがなぜ怒っているのかを理解する。今までは森の外との往復だったが、今回は逆だった。危険な森の奥へ向かうのに単独行動など、いくらレベルが上がったとはいえ、新人冒

険者のとるべき行動ではない。ましてや、それがリーダーの指示だというのであれば言語道断。

「違うんだよ！ ニクスはダメだって言ったんだけど、アタシたちが勝手に離れちゃったんだ！」

エイミーの訴えを聞いたシンは、ラドックとアデリアに目を向けた。

二人が首肯するのを確認したシンは、腕組みしたまま再度ニクスに問いかける。

「立てニクス、エイミーが言ったことは本当か？ 正直に答えろ」

「……はい、僕は四人で纏まって行動することを提案したんですが、別々に探した方が効率がいいと言われ、止める間もなく」

「なるほどな、それならニクスの提案は間違っていないな。よし、もう一度俺の前まで来い」

「……はい」

「ゴギッ——!!」

「ぐっ!! ん……」

シンの前まで来たニクスは次の瞬間、頬にシンの裏拳を食らって思わずよろけた。

「——!! てめえ、ニクスは間違っていないって言っただろ!？」

「外野は黙ってろ。ニクス、自分がどうして殴られたか言ってみろ」

「い、一度目は、仲間に単独行動をとらせたこと……二度目は……仲間の勝手な行動を止められなかったこと、です」

シンの拳を顔面に二度受けてふらつくニクスだったが、それでもなんとか答える。

「その通りだ。だが、分かっているのにできなかったのは、その逆よりなお悪い。お前がリーダー

として認められていない証だ。無能なリーダーは害悪でしかない、覚悟はいいか？」

「バキッ! ゴスッ! ゴガッ! ゴッ!」

ニクスは歯を食いしばり、シンの拳を逃げることなく受け続けた。

「やめてシンさん! 悪いのはアタシたちなんだから、殴るんならアタシたちを殴ってよ!!」

「冒険者として行動する中、お前たちが自分の意見を出すのも提案するのも自由だが、全ての、そして最終的な決定権はリーダーにある。だから失敗に対する責任をニクスが取る、当たり前の話だ。さらにニクスは今回、お前たちの勝手な行動を止めることができなかった。これはリーダーとして、判断を間違える以上に許されん。リーダーとしての資質を問われる由々しき問題だ」

止めに入ろうとする三人を目で制しながら、エイミーの訴えに対してシンはそう答える。

「今日は運良く魔物に遭遇しなかった。だが明日は? もしも単独行動中にオークに遭遇した場合、今のお前たちにどんな対応が取れる? 大声を出しても助けが来る前に命はないかもしれない、女ならもつと悲惨な未来が待ってるかもしれない。今日お前たちがそうならなかったのは、たまたま運が良かっただけだ。少しくらいレベルが上がった程度で調子に乗るな!!」

「ドサッ——」

踏ん張りがきかなくなったニクスが崩れ落ちると、シンはようやく殴るのをやめた。そして、地面に倒れ込むニクスの襟首を掴み、三人に向かって放り投げる。

「ニクス!!」

ラドックがそれを受け止め、顔を真っ赤に腫らしたニクスを優しく地面に寝かせると、エイミー

とアデリアも膝をついて、ニクスの顔を覗き込んだ。

仲間を心配する三人の背に、シンは追い討ちをかけるように言い放つ。

「お前たち、仲間が傷つくのは辛いのか？ ニクスは今後、リーダーとして何かを決断する度、お前たちが『こう』なるかもしれないという不安と、ずっと付き合っていくんだ。お前たちはこの上、自身の勝手な行動で呼び込んだ、危険や被害の責任まで背負わせるのか？」

三人は何も言えなかった。

シンのやりように納得しているわけではない、しかし反論の言葉が見当たらない。

大幅なレベルアップに浮かれていたのが事実なら、リーダーという言葉の意味、重みを考えもしなかった。今までがそうだったように、小難しいことはニクスに任せておけば、四人で力を合わせれば、きつとなんとかなる。そんな甘い考えでいたのを見透かされては、口を噤むしかない。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

大粒の涙を流すアデリアがニクスに謝り続ける中、彼らの前に一本の薬瓶が投げ込まれた。

「お仕置きは終わりだ。ほら、それを飲ませてニクスの怪我を治してやれ」

エイミーはすぐさま薬瓶の封を開け、ゆっくりとニクスの口に流し込んでやる。

シュオオオオ——

効果はすぐに現れ、ニクスの身体は完全に元気な状態に戻る。服に残った血の痕だけが、先程までの惨状を思い出させる印だった。

「俺がいたら話せないこともあるだろう。二時間ほどこの場を離れるから、晩飯と話し合いを済ま

せておけ」

そう言い残してシンはその場を離れ、森の奥へと消える。残された四人は——

「……ニクス、すまねえ。俺たちのせいだ」

「気にするなよ、ラドック。シンさんも言っただろ、これはリーダーである僕の責任だ」

「だけど——！」

「それに、今日シンさんに怒られてむしろ良かったよ。皆に何かあった後じゃあ、後悔してもしきれないだろうしね」

ニクスにそう言われては、ラドックもエイミーも黙るしかなかった。責任を負わされたニクスが納得しているのに、原因を作った自分たちが不満を述べていいはずがない。

「ヒック……グス……それでも師匠、あんなになるまで殴らなくてもいいのに……」

よほどショックだったのか、アデリアの口からそんな言葉がこぼれる。さっきの光景が頭から離れないようで、指先は今も小刻みに震えていた。

そんなアデリアにニクスは言う。

「それは違うよ、アデリア。シンさんがあそこまでしなくちゃいけないほど、僕たちが冒険者という仕事を甘く見ていたんだ。ちょっと身体を鍛えた程度の駆け出しのくせに、皆で力を合わせればなんとかなる、そんな浮ついた気持ちの僕たちをなんとか強くしようと、シンさんも必死なんだ」

ニクスはあの夜、シンが責任を持って自分たちを強くすると約束してくれたことを、三人に語った。

「だから、今回のことでシンさんを恨むのはなしだよ、ラドック？」

「でもよお……」

「ダメだ、僕たちはシンさんを信じてついていく、これはリーダーの決定だよ」

「……分かったよ。だけど俺はアイツを認めたわけじゃねえぞ。リーダーがそう決めたから従うんだからな！」

「私は師匠を信じます！　そしてリーダーのことも！」

「鍛えるための報酬も出世払いでいいって言ってくれたし、いい人なのは確かだよね」

「エイミー、お前アイツとなに話してんだよ……」

ラドックのぼやきに他の面々が笑い声を上げ、四人の間にようやく笑顔が生まれる。

そんな、四人が冒険者として少しだけ成長している頃——森の奥、シンは一人で、

「あ——————！！」

と、ニクスをボコボコにした居た堪れなさから、呻き声を上げていた。

必要なことだった。彼らがこの先も冒険者を続ける以上、それぞれの立場を理解する必要がある。家族の延長というな、あなあの関係は、いずれ取りかえしのつかない事態を引き起こす。

今回の課題は、そうならないために用意したものであり、見つかるはずのない探し物に苛立った誰かが単独行動を起こすことを見越した、いわゆる自作自演だった。

シンは自分が善人などとは思っていない。殺めた人の数は数えるのも馬鹿馬鹿しいほどで、おまけに自身の信条は『敵対する者には敗北と最大級の屈辱』、そんな男だ。

とはいえ、何度自分に言い聞かせようと、落ち度のない人間をわざわざ畏に敬め、偉そうに講釈をたれながらボコボコにするとは、さすがに鬼畜の所業だと自己嫌悪に身悶える。

「柄じゃないです！　鬼教官なんてキャラじゃないです！」

前世で人に何かを教えるときは、なるべく丁寧に、そしてできないことよりできることを、がモットーのシンだった。

しかし、前世と違つてこちらの世界は、できないことが即、死に直結する。シンとしては、慣れない演技をしても、身につけさせるつもりなのだ。

幸い四人は順調に成長している、それがシンにとつての救いだった。

「お願いだから早く一人前になってえ！　主に俺の精神衛生のために！」

人を育てるよりドラゴンを倒す方がよほど簡単だ！　そんな精神状態のシンは結局、四人のもとに戻るまで三時間ほど唸り続けていた。

訓練一〇日目。

「さて、そろそろお前たちにも魔法を——アデリア、はしゃぐんじゃない」

シンは朝から四人を座らせ、魔法について講義を始める。

「シンさん、アデリアはともかく、アタシたちが話を聞いて意味あるの？」

「エイミー、別に今魔法が使えないからといって、この先も絶対使えないというわけじゃない。何かのきっかけで使えるようになるかもしれないから聞いておけ。それに、将来魔道士と戦うことに

なつたときに役に立つかもしれない」

そう言つて、明らかに勉強が苦手と思われるエイミーとラドックをきちんと座らせ、シンは話を続ける。

「ではアデリア、そもそも魔法とはどういったものだ？」

「ハイ！ 魔法とは、魔力を使つてこの世界に様々な現象を引き起こす技です」

「よろしい、模範解答だ。ではその現象を引き出すのに必要なものはなんだ、ラドック？」

「呪文だろ」

術者の身体に宿る魔力を操り、それを呪文という言葉に乗せる。そして、呪文に込められた力はこの世界を漂う魔素に干渉し、『魔法』というかたちで顕現する。

魔素とはそれ自体に力はなく、ただそこにあるだけの存在だ。それに力を与えるのが呪文であり、一度の呪文詠唱で、より多くの魔素に干渉することができれば、効果も大きくなる。ただし当然、そのためには魔法を行使するための高いスキルレベルを必要とする。

——と、ここまで説明した時点で、約半数が眠たそうな顔をしていた。

「ところでアデリア、同じ魔法なのに魔道書に記された、または口伝で教えられる呪文だが、一言一句、同じというわけではない。それなのに魔法が発動するのはなぜだ？」

「……わかりません」

「エイミーはどう思う？」

「さあ……ホントは呪文に興味なんかない、とか？」

「半分は正解だ。呪文の詠唱はもちろん意味のある行為なんだが、それを唱えるのに用いられる文言自体はさして重要ではない、というのが正解だな」

魔素には意思がある。自我ではなく指向性という意味で。

呪文の詠唱によって魔素に干渉し、『属性』の付与された魔力へと作り変える。そして、呪文に込められた意図を『現象』として引き起こすものが、『魔法』という超常の技だ。

「水が水であるように、炎が炎であるように、魔素に対して『そうであれ』と語りかける、これが呪文だ。要するに、言葉に魔力をこめる、魔法発動に必要な魔素を確保、制御する、これができる者を、この世界では魔道士と呼んでいるわけだ」

「シンさん。それは、誰でも魔道士になれるということですか？」

「理屈としてはな。だがなニクス、冒険者の誰もがAランクにたどり着けるわけではないだろう？ つまりそういうことだ」

その言葉を聞いたアデリア以外の三人は、露骨に落胆の表情を見せる。

「三人ともそう落ち込むな。ちなみにだがアデリア、魔法発動に必要な魔素は、普段どうやって制御しているんだ？」

「どうやって、ですか？ それは……こう……なんとなく」

質問にどう答えていいかわからないアデリアは、なんだかあやふやな回答になってしまい、若干落ち込んだ表情を浮かべる。しかしシンは、答えに満足したようで、アデリアを褒めた。

魔力を言葉にこめる行為と魔素の制御、この二つは魔道士にとって、技術よりも感覚的な側面が